子どものいる暮らし—男・夫・父

子どものいない男・夫の子どもの話

神田　伸生

編集者から「子どものいる暮らし——男・夫・父」という欄に何か書いてほしいという依頼を戴いてしまった。私は、子どもがいないし、従って父親でもないからお断りしようと思ったが、編集者の次のようなお話を聞いて、思わず快諾してしまった。

子どもが生まれると、それ以前の大人だけの生活とがらりと変わって悪戦苦闘が始まり、いろんな見方をする必要に迫られたり、発見が生まれる。そんな子どもとの生活を男・夫の視点から書いてほしい。

このような主旨の依頼だった。ところがタイトルからも想像されるように、私には子どもがいない。結婚して自然に天から授かるはずの子どもが授からなかった。従って「子どもが生まれての悪戦苦闘

も、いろんな見方も発見」もなかったと言ってよいかも知れない。

しかし、恐らく少数派かも知れないが、子どもが授かり、進んで悪戦苦闘を期待し、子どもとともに日々の生活を発見していく、そんな生活を望んでも果たせなかった男・夫も少なからずいるのではないだろうか。この欄を借りて、父になれなかった男・夫の「子どものいる暮らしの話」を是非聞いてほしくなり依頼を引き受けた。

子どもがいないのに「子どものいる暮らし」をするとはどういうことかというと、自然の少ない都会でも自然好きな人なら自然を見つけるように子どもを見つけるとよい。そして、自然愛好者が自然を暮らしの中に取り込む工夫をするように「子ども好きな人」なら子どもを暮らしの中に取り込む工夫をすればよいと思うようになった。

自然を見つけるように子どもを見つける事例

――乗り物の中での楽しみ

電車や飛行機、そして数秒間とはいえエスカレーターでの私の一番の楽しみは、子どもと仲良しになることだ。「エスカレーターに乗っているうちに子どもと仲良しになるってですって！」と驚く方もいらっしゃるかも知れない。嘘だと思うなら是非ためして頂きたい。但し、私のような年配（五十一歳）で男性の方には、次のような厳しい？　条件がある。

①自分一人ではなく夫婦一緒か、それとも他の家

族と一緒であること――この条件がないと子どもの親にアブナイ大人と思われる可能性があるので注意が必要。

②子どもの年齢は十か月頃から一歳半頃までであること。そして多くは親と向き合うような姿勢でダッコされていること。

③ダッコされている子どもの後ろに立てれば、従って、子どもと向き合う位置に立てればエスカレーターは昇りでも下りでも構わない。自然に子どもと視線が会うから。

④ソーッと、ソーッと子どもと視線を会わせること。そして、子どもがこちらに好意の眼差しを返してくれたら、無言で（親は進行方向を向いているので気付かない）アヤシ続けること。

〝仲良し〟になることに全てが成功するとは限らないが、私の経験ではかなりの確率で成功している。なかにはエスカレーターから降りる時に、思わず「バイバイと手を振ってくれる子（一歳半ぐらい）」がいたり、「キャッキャ」と喜んでいる我が子（十か月ぐらい）の様子でこちらに気付き、会釈してくれる親がいたりして幸福な気持ちになれる。

エスカレーターに乗っている僅かな時間でも〝仲良し〟になれるのだから、電車や飛行機の中ならかなりの〝仲良し〟になれるはずだ。但し、一度〝仲良し〟になったら最後まで責任を持つことだ。

一年程前、東京から千歳までの飛行機の中でこの責任の重さに負けそうになったことがある。離陸して間もなく、私の前方四～五列前で一歳前後の女の子が泣き始めた。かなり大きな泣き声だったので、露骨に嫌な顔をする人もいた。母親は座席に座ったまま女の子をダッコして立たせ、アヤシ始めた。私は母親の心中を思い、座ったままその女の子に好意の眼差しを送り続けた。女の子は私の眼差しに気付き、泣くのをやめジーッとこちらを見続けた。やが

て母親は、女の子の機嫌が直ったと思ったのか、自分の膝の上に座らせた。女の子は再び泣き始めた。母親は最初のように立たせダッコをした。立った女の子の視線が私を捜しているのにすぐ気付いた。私は嬉しくなって無言でアヤシのサインを送り続けた。私と女の子は四～五列の距離を置いて暫くコミュニケーションを楽しんでいた。母親は、それに気付かず、再び女の子を自分の膝の上に座らせた。女の子はまたすぐに泣き始めた。今度は確実に私に相手をして欲しくて……。こんなことを二～三度くり返している内に、ようやく母親がこちらに気付き、私たちの方を向き会釈をしてくれた。

帰省途中の旅の情も味わいたかったが、妻に「最後まで責任取りなさいよ」と励まされ、とうとう着陸まで女の子の相手をしてしまった。

男・夫で子どものいない皆さん、都会で子どもを見つけるのは、自然を見つけるのに似ていると思う。都会にも自然はある！　ただ私たちはそこに立ち止まって自然を見つけようとしないだけだ。同じことが子どもについても言えると思う。子どもの前で立ち止まり、子どもを見続けることから暮らしを始めては如何でしょうか。

自然を取り込むように暮らしの中に子どもを取り込む事例―一時預かり所のススメ

私たち夫婦が自分たちの幸福、楽しみのために「一時預かり所」のようなことをし始めてから十一年～十二年になる。自分たちの幸福、楽しみが最優先されるからもちろん料金は無料。対象は〇歳～就学前の子どもで、親子とも互いに知り合いになることが最も厳しい条件である。

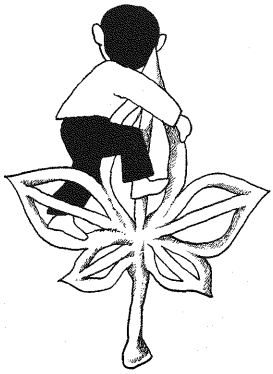
この「最も厳しい条件」とは、実は先方に対する条件というよりは、むしろ私たち子どものいない夫婦に対する厳しい条件だということにお気付きだろ

うか。都会で、しかもマンション住まいを転々としてきた夫婦にとって、子ども、そして子どものいる親子と知り合いになることはとても難しいことなのです。子どもがいない夫婦は、子どもが好きではないと思われやすいらしいのです。そこまではいかないまでも、子どもがいると迷惑をかけると思われているらしいからです。

自然を取り込むように暮らしの中に子どもを取り込むためには、まずこのような偏見と闘う勇気と実践が必要です。

私も「偏見と闘う勇気と実践」のためには次のような手順が必要でした。

①マンションでのエレベーター内での出会いを大切にし、しかも慎重にする。前述のエスカレーターとは違い、エレベーターは密室なので細心の注意が必要！　軽く会釈をするのは常識だが、ソーッと、ソーッと優しく驚かさない程度の眼差しを送り、バイバイと親子を見送るように別れる。



②何度か会って顔見知りになったら親の方に子どもの名前を聞く。子どもの名前がわかるようになったら、今度は「○○ちゃん」と子どもの名前を呼んで話しかけたりアヤシたりする。

③、①と②までは、偶然の「出会い」を頼りにするしかないが、ここまで来たら、ターゲットを絞り、妻を連れて「今日は○○ちゃん狙い」などと称して目当ての子と会いに行く努力が必要（妻を連れていくのは、先方の母親を安心させるため。但し、出会いが空振りに終わることが多いので妻の理解が

絶対に必要！）。運良く○○ちゃんと会うことが出来たら、照れずに「よかった！　○○ちゃんと会いたくて待っていたの」と正直に言う勇気も必要。そして、「オジちゃんもオバちゃんも待ってるから、遊びに来てね」と別れる。

④この頃になると、妻は女同士のよしみで母親と知り合いになっているから、後は、男で夫である私が本当に自分の家に親子ともども遊びに来てほしいと思っていることを理解してもらえさえすればよい。

⑤親子で一度遊びに来てくれればシメたもの！　暫くすると女同士で話に夢中になることがあるから、男・夫の私が子どもを一人占めに出来ることがある。

⑥やがて子どもは「十一階のオジちゃんのオウチにイキターイ」と母親にねだるようになる。親さえいなければ自分の家では厳禁の「ジャーンプ」も私の家では許されるから、親がいない方が子どもには楽しい。

⑦親には申し訳ないが、私たち夫婦と子どもが最も自然に、しかも感謝さえされて遊び続けていられるのは、親に特別の用事が出来たり、兄弟の誰かを病院に連れていったりする時、つまり、我が家が「一時預かり所」になった時である。そして、このような時に男・夫の私も「子どものいる暮らし」の幸福を味わったような気がするのです。

男・夫で子どものいない皆さん、都会で子どもを暮らしに取り込むには、自然を暮らしに取り込むのと同じだということがわかって戴けたでしょうか。自然と同様、身近に子どもはたくさんいるのです。

（鶴見大学短期大学部）